

アクティブラーニング型授業の導入における 英語学習成果の検証～大学集中講義の場合～

Verification of English Learning Outcomes in Using Active Learning Method - In the Case of Intensive Lectures at University-

山林伸江

Nobue YAMABAYASHI

Abstract

As of April 2020, English language will become a required subject in elementary school in Japan. This is due to a focus on Japanese education to develop a globalized population, able to communicate fluently in English. However, Japanese university students struggle to communicate with native speakers, due to lack of vocabulary and fluency, despite having studied English for more than six years. The Japanese approach to teaching, focused on “lecture style” teaching, may be a factor in the reduction of motivation in the students. This paper discusses a study which measures the change in English language ability of university students before and after learning through an “Active Learning Method” approach.

1 はじめに

文部科学省によると、2020年4月から日本全国の小学校で英語教育が行われることが決定した。2018年度から移行措置がとられており、ALT¹外国人教師を採用してネイティブの発音に触れる英語教育が行われている。2020年に完全導入される英語教育は、小学校3年生から6年生を対象に必須科目となる。この年齢からネイティブ英語に触れることで英会話の向上が期待できるが、現在大学に在籍している年代層の英語学習歴は中学から学び始めた者が多く、学校以外に受験英語ではない英語教育を強化してきた者はまだ多くない。むろん学校では、今日でも大学受験に向けた英語指導をはじめ、教科書をベースにして読み書きを中心とした講義型が多いため、聞く・話す作業は伸び悩んでいることは否めない。現在日本の多くの大学では、国際人の育成に力を入れていることが多く、本学も同例である。しかしながら、指導者の立場として感じる問題点は日々の授業体制にあるのではないかと推測する。

筆者がこの研究を始めるきっかけになったのは、海外短期研修での実体験からである。筆者は英語海外短期研修や英語の授業を担当しているが、そこでよく実感するのは、“聞いて話すことを苦手としている学生が多い”こと、“日本人の前で英語を話すことに羞恥心を感じている”

ことである。海外研修では、ほぼ団体行動になることが多いため、殻を破り自発的にならないと、日本語での会話が始まり、英語はできる人に頼ってしまう傾向にある。海外研修の参加申し込み時点では英語力向上を目標にする学生も多いが、早々に諦めてしまう。そのような人材が多いと、研修開始まもなく、日本語交じりの英語を話す、昼休みには完全日本語を使うなど英語環境にいるのにもかかわらずその特権を活かせないまま研修を終えることも多々ある。

筆者が担当している授業の1つに「Get Together and Talk I」という英語科目がある。この科目は、夏休みや春休みの集中講義に開催され、1日あたり4コマを連続して行うため、集中して英語教育を行える環境にある。語学習得には継続することが向上するうえで重要なポイントとなるが、短期集中型で学生の集中力と自分の英語力の測定を測るには集中講義が適当だと感じたため、この度、アクティブラーニング形式を導入することとした。本研究では、この集中講義という短い期間でアクティブラーニング形式を用いて授業を行った場合、学生の英語力にどのような変化があるのかを実験調査した。

2 授業概要

Get Together and Talk Iは国際交流センター科目として前期後期の集中講義として英語科目として開講されている(2019年度は開講せず)。授業では、異文化コミュニケーションの理論を学び、授業内に提供するアクティビティやゲスト講師との交流などの実践を通して異文化コミュニケーション能力の向上を図ること目的としている。ゲスト講師は愛知県在住の外国人を招き、1ヶ国1コマを担当、自国の文化を資料や物品で紹介したり、ミニクイズを作ったりして工夫を凝らしながら異文化理解を深める授業をしてもらった。筆者が担当した5年間では、カナダ、イギリス、イタリア、フランスの4か国のゲストを招いた。英語が母国語でない国のゲスト講師は日本語も話せる状態であったが、国によって変わるアクセントの違いを生徒自ら発見し、様々な英語の発音を聞く場にもしたかったため、あえて英語で行ってもらった。ゲスト講師が担当しないコマに関しては、日常生活に必要な英語の習得、各国のマナー、サインボード、法令事情、英単語の習得など日英混合で行った。

3 英会話における問題点

英会話においては、学生が苦手とする分野がいくつかあると感じた。その背景には「語彙力不足」と「英語を話すうえでの羞恥心」の2つの問題点が存在すると予測する。例えば、海外研修では、時間の読み方、前置詞、感情表現、地図を読む・道案内の場面で必ず戸惑いが起きていた。困り果てている学生にその心情を聞くと、「どのように話していいかわからない、日本語では出ているけど英語に変換できない」という解答が多かった。一方、集中講義の授業では、指名されなければ話さない姿勢が多かった。また、指名されても海外研修同様、どのように解答したらいい

いのかわからず、ただ苦笑いで対応している者もいた。質疑応答の時間も設けている。そして、人前で発言することが恥ずかしい、自分の意見をみんなに聞かれないといった羞恥心が大きく左右されている。そこには「パーフェクトな英語を話さなければいけない」といった考えが軸に存在している。そして、いったん日本語で考える癖が付き、わからなくても聞き返さず、小声で発言し、あいまいなあいづちで乗り切る習慣がついてしまっている。さらに、従来の英語教育では、学生自身が英語を発する機会が少ないため、棒読みかつ日本語アクセントの発音がまかり通ってしまっているのだ。

4 調査方法

4-1 調査方法と対象者

本研究においては、2018年度後期のGet Together and Talk I受講生を対象にした。授業は2018年2月18日～21日に行われた。授業開始前と最終日の授業終了時に同じテストを行い、どのように変化があったのかを調査した。

学生の属性は表1の通りである。履修登録数は、文学部8名、人間情報学部1名、創造表現学部（メディアプロデュース学部）5名、交流文化学部14名、グローバルコミュニケーション学部7名の5学部から計35名であったが、6名が欠席したため、合計29名を調査対象とした（表1内矢印で最終数を表記）。性別の内訳では男子学生が2名、女子学生が27名であった。

表1 2018 Get Together and Talk I 後期受講生数

学部	学年・性別							
	1年		2年		3年		4年	
	男	女	男	女	男	女	男	女
文学部				6				2→1
人間情報学部					1			
心理学部								
創造表現学部				1→0			2→1	1→0
メディアプロデュース学部*								1
健康医療科学部								
福祉貢献学部								
交流文化学部				10		4		
ビジネス学部								
グローバルコミュニケーション学部				7→5				

* 2016年～募集停止

(n=35)

図1は受講生が在学中に受けたTOEICスコアの結果である。縦軸は人数を表しており、横軸はTOEIC点数を表している。英語を主として学んでいる学部の生徒は入学後から幾度か同試験を受験しているため、複数受験した学生は授業の直近のスコアを引用した。本稿では受講生の英語レベルの参考として掲載する。内訳をみてみると、100～199点は1名、200～299点は4名、

300～399点は6名、400～499点は14名、500～599点は2名、600～699点は1名、800～899点は1名であった。事前テスト、事後テストともに回収率は100%であった。

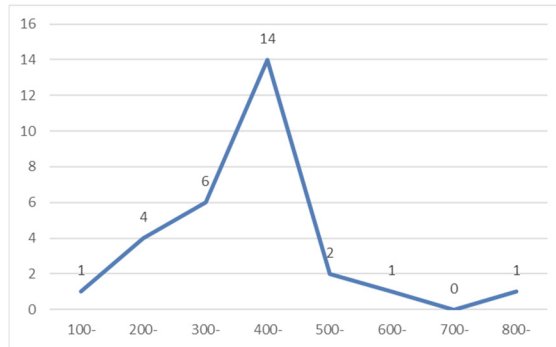


図1 入学時に受けたTOEICスコア

4-2 テスト内容

テスト内容は3で提唱した4項目（時間の読み方、前置詞、感情表現、地図を読む・道案内）に絞った。第1の設問では、イギリス・カナダ・オーストラリアでBritish Englishが使われているが、これらの国の日常で頻繁に使われている時間の読み方である。時間によっては「TO」や「PAST」「QUARTER」などの単語を用いて表現する言い方、つまり、10:13の場合、Quarter past ten という表現である。第2の設問は前置詞だが、「動き」に関する前置詞と「場所」に関する前置詞に特化した。例えば、物の中にいる場合はinを使うなどである。第3の設問では、主にあいづちの感情表現を出題した。絵とヒントである単語の頭文字を見て解答する形式で、絵を見ればたいていの意味合いがわかるものを抽出した。例えば、うちわを持って暑そうにしている単語の頭文字がHとある場合はHotが解答となる。第4の設問では、世界地図を掲載し、ランダムに番号を振った。例えば、ヨーロッパの地図を置き、10番は何の国か解答するものである（正解はGermany）となる。第5の設問では、筆者オリジナルで架空の町のマップを作成し、A地点からB地点まで行く道のりを書いてもらうようにした。

5 授業の取り組み

5-1 グループ分け

1コマ90分の授業を15回4日間で行うにあたり、アクティブラーニング形式の授業ではまずは、グループ分けを行う必要がある。筆者が取り入れたグループ分けはトランプである。グループは大グループとペアの2種類のタイプに分け、大グループでの作業が伴う授業の場合、トランプの裏に7枚1組として5つのカラーに分けて、1コマの参加者人数により毎回4～5グループ（グループ内の人数は4～6名）になるように振り分けた。ペアのグループの場合は、トラ

ンプのマーク（例えば黒のスペードと黒のクローバーがセット、赤のハートと赤のダイヤがセットといった具合）と数字がペアでマッチするように配置している。毎回授業開始時、学生は無作為にカードを引き、引き当てたカラーや番号でグループ（ペア）を組んでいくといった具合である。グループ（ペア）は意図的に決められていることではないことが、学生自身にも通じるため、グループ決めについての混乱やクレームは一切せず、年齢や学部を超えて課題に取り組める。加えて、カード引きで毎回違ったメンバーと交流を持つことから、互いを知る機会も多くなり、積極性と協力性が芽生え、考えの相違が生じてもそれを理解し合う様子もみられた。授業を受ける姿勢にも良い変化をもたらす結果となった。

5-2 VAK モデルを起用した指導

今回の授業では、VAK²モデルを取り入れた。VAK タイプを簡易的に診断し、学生自身がV（視覚タイプ）、A（聴覚タイプ）、K（体感覚タイプ）のいずれかを自覚し、タイプに有効とされる英語学習方法で授業、自主学習時も学ぶよう促した。日本NLP協会によると、VAKモデルには、視覚、聴覚、体感覚それぞれに得意とする勉強法があると定義づけている。Vの視覚タイプの場合は、目で見たことを覚えることを得意とするため、読み書きを中心に覚えていくことを推奨している。Aの聴覚タイプは、聞いて覚えることを得意とするため、講義で聞いたことをそのまま口にするのを推奨している。Kの体感覚タイプは、実際に体験して覚えていくことを得意とする。アクティブラーニングのように作業をしながら勉強すると記憶に残りやすいとされているため体に動きをつけながらの作業を推奨している。

今回の受講生はVが20名、Aが4名、Kが5名であった。講義型に慣れている日本の学生は予想通りVが多かったが、AやKの学生も少なくなかったため、授業ではVAKモデルが活かせる要素を取り入れながら取り組みを行った。

5-3 授業組立

授業のカリキュラム設定では、ゲスト講師のスケジュールにもよるが、「ゲスト講師の授業前には、それに関連した授業を行う」と「グループで話し合いながら作業ができる課題の授業」の2点に重点を置いた。例えば、フランス人ゲスト講師の授業の前には、世界地図の勉強をすることとし、イギリス人ゲスト講師の授業の前にはBritish Englishの時間の読み方についてといった具合だ。

以下、フランスの授業を例に説明する。フランス授業では、フランス領土の説明から各国の民族衣装、フランス国内の食事情の違い、フランス人が領土に旅行する場合など学生の興味を引く内容で授業が展開される。アクティブラーニングを取り入れる前の授業では、ヨーロッパにあるフランス以外にもフランス領土は世界中にあるが、学生はその領土がどこに位置しているのか知らない者が非常に多い。そのため、そのあとに続く授業の内容を十分理解していなかつ

た。今回は、授業を把握すべく、A3 サイズにコピーされた世界地図（国名の記載なし）を各グループに配布し、自分たちがわかる国名を英語で書き足していく作業を行った。記述は英語が主体、英語がわからなければ日本語も可とした。国名も正式名称で書くことを前提とし、わからなければ崩した形でも可とした。自由記述での作業が終了した後、その国名と場所が適合しているかを答え合わせしながら確認していく。Vの学生は目で見えて覚え、Aの学生は周りとの会話から覚え、Kの学生は採点したり訂正したりと紙に書き込んでいく作業を通じて覚えていく。それぞれが VAK と違ったメンバーが交じり合っただけの作業のため、次第にグループの盛り上がりも変わっていった。また、科目初日のテストで見ている世界地図であったことから、自身が解答できなかったところを再確認している姿を垣間見ることができた。

これ以外にも、用語リストを準備して、基礎英語の勉強をした後ペアになって会話を始める授業、英単語の答えを出すのに他の英単語で言い回しを行う授業、海外研修で撮影してきた現地の看板やサインボードをみながら何を表しているかを考える授業など海外のマナーや法律なども取り入れて行った。授業が終わった休み時間になると、「次はどんな授業になるのかな？誰と同じグループになるのかな？」という声も聞くようになり、そのエネルギーが継続できていた。

6 テスト結果

図2は授業開始前後の解答率と正解率である。テスト時間は科目初日の20分と終了日の20分で2回行った。設問は全部で5つ用意した。設問1、2、3は5問あり各1点、設問4は10問あり各1点、設問5は5点とし、合計30点とした。すべて自由記述とした。横軸はテストの設問数で、縦軸は正解の平均数である。B解答率棒グラフは科目開始当初に行ったテストの解答率を表しており、F解答率棒グラフは科目終了時に行ったテストの解答率を表している。B正解率折れ線グラフは科目開始当初に行ったテストの正解率を表しており、F正解率折れ線グラフは科目終了後に行ったテストの正解率を表している。

まず、開始前と終了後の解答率を見てみると、設問1～2に関しては、授業前後での差はそれほど大きな差はみられなかったが、設問3、4に関しては、絵を見て答える形式で文字数のヒントを与えていなかったため、個人差にばらつきが出てしまった。設問5に関しては、長文筆記を必要としていたからか、23名は1文も書かずに白紙で提出し、残り6名も1～2行がほとんどであった。唯一1名のみAからB地点への説明ができていたが、単語 (Traffic light=信号機) がわからずに日本語に置き換えている結果だった。

続いて、開始前と終了後の正解率を見てみると、どの設問も開始前より多い正解率を得ることができていた。特に注目すべきは設問5であった。授業開始前では1割にも満たなかった解答率であったが、授業終了後のテストでは、全員が複数行に渡って記述をしていた。その解答の英語もしっかりと道順に沿って解答をした者は12名もいた。それ以外の学生も多少の接続詞は

抜けているものの、理解できる範囲での解答を導きだしていた。90分の授業でここまで成果があったことは驚きであった。

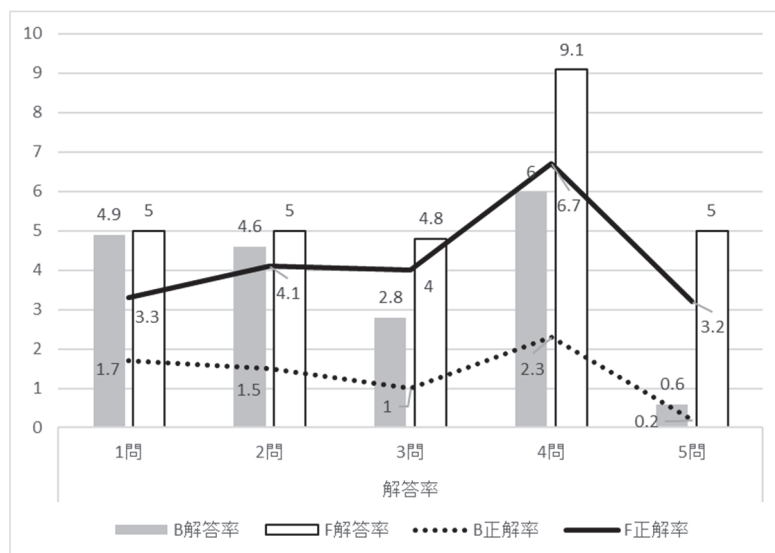


図2 授業開始前後の解答率と正解率

7 おわりに

実践調査を終えて感じたことは、授業をアクティブラーニング形式に変更したほうが、生徒同士の会話が増えることは明らかだった。4日間という短い期間でも、最初の数時間と最後の数時間では授業を受ける姿勢が違い、誰もが伸び伸びしながらも柔軟かつ積極的に物事を考え発言する場へと変化していった。

英語学習においては、VAK でわかった自身の特徴と向いている学習方法を認識するとともに、同じ日本人でもそこに違いが存在することを理解し、受け入れることができていた。授業でも繰り返し様々な人と英会話をすることで、話すことの楽しさを覚えた学生は、終盤の授業では羞恥心を持っている者はほとんどなく、話す相手を探して駆け寄って会話をする姿も見られた。むろん、現時点では語彙力が少ないため、用語リストは手放せなかったが、授業以外で自身の学習方法に則って英語学習を継続する者も存在したため、いずれは自身の言葉で考え発言できる人材になるだろうと確信した。

授業を運営する側にとっては、これまでの講義型では、淡々と授業を展開していく中で、誰が付いてこれられていないか知る術がなかったこと、授業中盤には居眠りする者もいて、全員を講義に集中させる難しさが課題であった。しかしながら、アクティブラーニング形式では、居眠りはおろか私語する者もなく、話していると思えば授業に関することで、不明な点があればその場で聞くなど実に実りのある授業展開が行われたと感じた。加えて、KだけでなくVやAの学生さえも、講義型よりもアクティブラーニング形式の授業展開のほうが、すぐに学びを取り入

れている感覚があったことは否めない。

謝辞

本調査研究は原稿執筆にあたり、2018年度後期に行われた集中授業 Get Together and Talk I を履修した学生にご協力いただいた。ご協力ありがとうございました。

参考文献

日本NLP協会 Homepage (<https://www.nlpjapan.co.jp/>) (最終アクセス 2019年12月11日)
ピンタレスト Homepage (<https://www.pinterest.jp>) (最終アクセス 2018年2月16日)
文部科学省 Homepage (https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/index.htm) (最終アクセス 2019年12月11日)

注釈

-
- ¹ Assistant Language Teacher の略で、外国語を母国語とする外国語指導助手のことを指す。主に小中高校の語学の授業を行う日本人教師の補佐を行い、自然な流れで語学の習得を目指す。
 - ² NLP の代表システム (VAK モデル)。五感(視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚)で感じるものを3つの代表的なモデルに分類(視覚=Visual・聴覚=Auditory・身体感覚=Kinetic)したもの。